



Title	活性酸素による肝細胞傷害における細胞内Ca ²⁺ の動態とその役割
Author(s)	村田, 賢
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3075294
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	むら た まさる 村 田 賢
博士の専攻分野の名称	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 1 1 1 8 4 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 6 年 3 月 15 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	活性酸素による肝細胞傷害における細胞内 Ca^{2+} の動態とその役割
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 森 武貞 (副査) 教 授 鎌田 武信 教 授 祖父江憲治

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】

種々の細胞傷害モデルにおいて、 Ca^{2+} は重要な役割を果たしていることが明らかとなり、肝臓の虚血・再灌流傷害でもその病態との関連において研究が進められている。しかし、個々の細胞で細胞内 Ca^{2+} の動態を細胞傷害との関係で検討した報告は少ない。そこで、著者はラット初代培養肝細胞を用いて、細胞外に superoxide を発生させる肝細胞傷害の系で、superoxide 発生後の肝細胞内自由 Ca^{2+} 濃度 ($[\text{Ca}^{2+}]_i$) の変化を観察し、膜傷害の進展における役割を検討した。

【方法】

Seglen の方法に準じたコラゲナーゼ還流法で得たラット肝細胞をカバーガラス上で24時間培養した。まず、培養肝細胞に hypoxanthine (HX) と xanthine oxidase (XO) を最終濃度がそれぞれ250mM, 75mU/ml となるように添加し、以後経時的に培養液中の LDH を測定した。次に HX と XO 添加後30分間、同一細胞で $[\text{Ca}^{2+}]_i$ の動態と細胞の形態学的変化を Ca^{2+} を含む buffer 中と Ca^{2+} を含まない buffer 中で観察した。 $[\text{Ca}^{2+}]_i$ の測定は培養肝細胞に Ca^{2+} 感受性蛍光色素 fura-2-AM を $5\mu\text{M}$ の濃度で負荷後、蛍光顕微鏡 2 次元画像処理システムを用いて行った。形態学的変化は顕微鏡と走査型電顕で観察した。次に、細胞傷害抑制の目的で培養液中に EGTA, superoxide dismutase (SOD) と catalase, nifedipine, calpeptin の添加物を加え、同様に観察した。

【成績】

培養肝細胞に HX と XO を添加すると、buffer 中に Ca^{2+} を1.27mM 有する場合、放出される LDH 活性は添加 1 時間後より上昇しはじめ、5 時間ではプラトーに達した。その時、前値が約200nM であった $[\text{Ca}^{2+}]_i$ は、HX と XO の添加18分後より上昇しはじめ30分後には約700nM に達した。形態学的には添加18分後より電顕でのみ観察しうる small bleb が散見されるようになり、添加21分後には large bleb が顕微鏡上観察された。30分後にはさらに、その大きさも数も増大し、全細胞の約57%の細胞の表面に large bleb が観察された。Buffer 中に Ca^{2+} を添加しないと、 $[\text{Ca}^{2+}]_i$ は HX と XO の添加後30分間は上昇は見られず、細胞表面に large bleb を有する細胞も全体の約26%と有意に低下した。さらに、buffer に EGTA を添加すると $[\text{Ca}^{2+}]_i$ は徐々に低下し、約10%の肝細胞に large bleb が観察されたにとどまった。細胞外の Ca^{2+} の有無に関わらず HX と XO の添加30分後まで LDH は放出されなかった。また、superoxide の産生は Ca^{2+} を添加しない場合でも、 Ca^{2+} を添加せず EGTA を添加した場合でも影響されなかった。

以上より、肝細胞に superoxide を作用させると、細胞傷害は Ca^{2+} が細胞外より細胞内に流入することによって始まり、続いて細胞膜に small bleb が、さらに large bleb が形成され、その30分後より細胞膜の破綻が始まり、5時間後には全細胞が死に至るという経過をたどると考えられた。SOD と catalase は用量依存性に LDH の放出と $[\text{Ca}^{2+}]_i$ の上昇を有意に抑制した。Superoxide の産生は SOD の存在下で完全に抑制された。HX と XO の添加3時間後の buffer 中に放出された LDH と $[\text{Ca}^{2+}]_i$ の上昇は $1\ \mu\text{M}$ の nifedipine の存在下で抑制された。Superoxide の産生は nifedipine の存在下で影響されなかった。すなわち、 $[\text{Ca}^{2+}]_i$ の上昇を抑制すると細胞傷害も軽減された。 $30\ \mu\text{M}$ の calpeptin (Ca^{2+} 依存性 non-lysosomal なプロテアーゼ阻害剤) の存在下で HX と XO を buffer に添加すると LDH の放出は有意に抑制された。Bleb の形成も $30\ \mu\text{M}$ の calpeptin の存在下では抑制された。しかし、calpeptin の存在下でも superoxide の産生や $[\text{Ca}^{2+}]_i$ の上昇は抑制されなかった。

【総括】

今回の実験で、superoxide による肝細胞傷害時には細胞膜に何らかの変化が生じ、細胞外より細胞内に Ca^{2+} が流入することになる。次に、 $[\text{Ca}^{2+}]_i$ が上昇し、その結果 Ca^{2+} dependent nonlysosomal protease が活性化され細胞骨格が傷害され、細胞傷害が進行する可能性が示された。また、これらの過程を抑制することのできる薬剤を用いることにより虚血肝障害が予防できる可能性も示された。

論文審査の結果の要旨

これまで種々の肝細胞傷害モデルにおいて細胞外 Ca^{2+} の役割や細胞内 Ca^{2+} の動態について検討されているが、肝の虚血・再灌流傷害のメカニズムについて一定の結論は得られていない。

本論文は、肝虚血・再灌流傷害のモデルとして hypoxanthine と xanthine oxidase とによって superoxide を発生させる系を用い、細胞内 Ca^{2+} 量と形態の変化を経時的に比較検討したものである。その結果、細胞外 Ca^{2+} の流入によって細胞内 Ca^{2+} が上昇し、上昇した細胞内 Ca^{2+} が細胞傷害を進行させることが示された。また、その機序として、上昇した細胞内 Ca^{2+} によって活性化された calpain が細胞骨格を傷害し、細胞傷害が進行する可能性が示された。

本研究は、superoxide による細胞傷害のメカニズムを解明する上で重要な手がかりを与えるものであり、学位に値する。